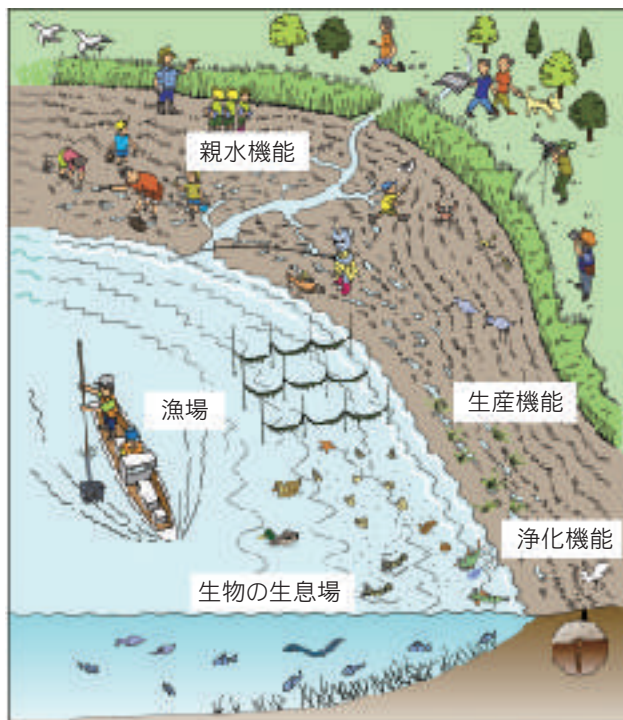


多摩川河口干潟の生物・底質調査

東京湾奥に残された貴重な干潟「多摩川河口干潟」の調査により、絶滅の恐れのあるトビハゼをはじめ、多様な生物が生息していることを確認しました。

はじめに

干潟は、隣接するヨシ原や浅場などとともに、多くの生物の生息場所になっています。そこには、干潟独特の豊かな生態系が形成されています。干潟は、生物にとって、また、私たち人間にとっても大切ないろいろな機能をもっています。近年、このような多彩な機能をもつ干潟の重要性が注目されています。



干潟のいろいろな機能

多摩川河口干潟について

多摩川河口には、かつて「羽田洲^す」と呼ばれる広い干潟が広がっていました。のり養殖やアサリ漁業も盛んに行われていましたが、空港建設、港湾整備などで干潟は減少し、現在では約0.45km²が多摩川の中に残されているだけです。

昔に比べて小さくなってしまった多摩川河口干潟ですが、東京湾奥部の西側に残る唯一のまとまった干潟であり、その存在は大変貴重なものです。春秋には多くの渡り鳥が訪れ、ハゼをはじめとするたくさんの魚も生息しています。最近では、東京湾では絶滅したと考えられていたアサクサノリの自生群落が発見されるなど、その貴重性が注目されています。

このように数多くの生き物が生息する自然豊かな多摩川河口干潟は、三番瀬や盤洲干潟^{ぼんず}とともに「東京湾の干潟・浅瀬」として、環境省が2002年に発表した「日本の重要湿地500」にも選ばれています。



自然豊かな多摩川河口干潟

多摩川河口干潟の生物・底質調査

この干潟に生息する生物とその生息環境の現状を把握することを目的に、川崎市による「多摩川河口干潟の生物・底質調査」が実施されました。調査項目は、干潟の代表的な生物群である「底生生物(動物)」と、その生息環境としての「底質」です。干潟の調査では、「生息状況の調査」と「生息環境の調査」をセットで行うことが重要となります。



現地調査の様子(採泥器による干潟生物の採取と目視観測)

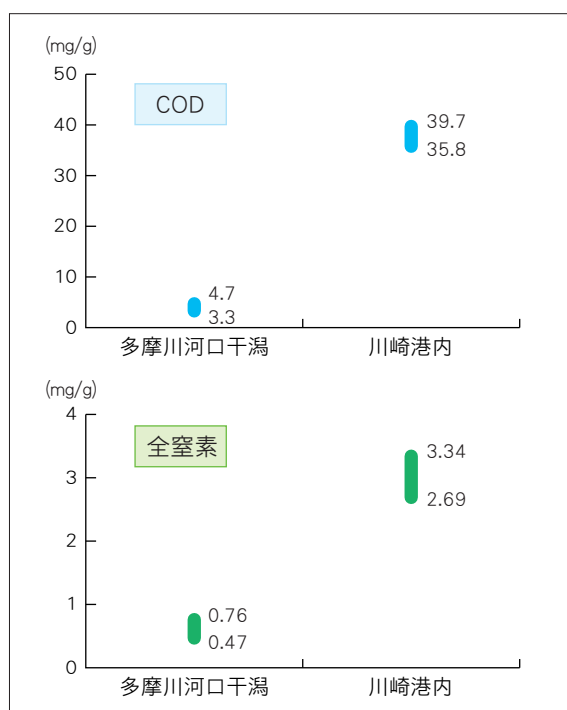
75種類の動物を確認 貴重種のトビハゼも!

調査の結果、貝の仲間、ゴカイの仲間、カニの仲間など全体で75種類の底生動物を確認しました。この中には、環境省のレッドデータブックで「絶滅の恐れのある地域個体群」に指定されている「トビハゼ」なども含まれています。



多摩川河口干潟で確認されたトビハゼ
(環境省レッドデータブック指定種)

このように多様な動物が生息しているのは、多摩川河口干潟の環境が、それだけ良好な状態で維持されていることの証しです。このことを裏付けるデータとして、底質の分析結果を比較してみました(下図)。



多摩川河口干潟と川崎港内の底質の比較

有機汚濁の指標であるCOD(化学的酸素要求量)の値は、水深の深い川崎港内の調査地点では30mg/gを超える値であったのに対し、多摩川河口干潟では5mg/gを下回る良好な値となっています。同様に、富栄養化の指標である全窒素の値も、多摩川河口干潟の方が著しく低い値となっています。

このような違いがみられるのは、干潟では潮汐の干満作用によって底質中の間隙水が頻繁に交換されることや、底質が大気と接触することによって好気的条件が維持されやすいので、底質中に生息するバクテリアなどの微生物が有機物を活発に分解するためと考えられます。

今後の取り組み

東京湾には、昔、湾奥部に沿って幅広く干潟が広がっていました。しかし、埋め立て等によってその大部分が消失し、現在の干潟の面積は明治後期の約1/8と言われています。

当社は、現況把握から予測・評価・設計までの多岐にわたる干潟関連技術で、これまで日本全国の干潟のさまざまな課題に取り組んできました。今後も、その技術力を駆使し、東京湾に残された数少ない干潟環境の保全・再生に取り組んでいきたいと考えています。

本調査の結果は、川崎市が発行する小冊子『多摩川河口干潟の生物と底質』(2006.3)に公表されています。この冊子の編集は当社が担当したものです。一般の人にも分かりやすいように、イラストや写真を多く取り入れ、用語解説なども加えています。

事業成果の広報資料や環境教育の教材などとして、今後、このような資料の社会的ニーズは高まっていくものと考えられます。



〈多摩川河口干潟の生物と底質〉